

南京大虐殺の遺族初証言へ 父の首と胴、別のものに

日本憎かつたが今は……

12日、大阪の集会で

旧日本軍が一九三七年十二月十三日に中國・南京を占領した直後、多數の軍民を殺害した「南京大虐殺事件」で、父親が日本兵に殺される現狀に肩あわせた台湾在住の中國人が十二、十三の兩日、大阪と東京で開かれる集会で証言する。附いた市民団体などによると、同事件の被害者や遺族が日本の集会で語るのは初めて。父親の名は、戦後の東京裁判にも出ており、歴史を伝える貴重な証言者だという。

台湾・台中市の高校教師
尚照寛さん(左)。市民団体
「アジア・太平洋地域の戦
争犠牲者に思いを馳(は)
せ、心に刻む集合」(事務
局・大阪市)の招きで十日
に大仏空庵に参く。

今年八月十五日、同会の
名簿には尚さんの父、尚
徳仁さんの名が載ってい
た。

当時五歳だった照寛さん
の記憶では、一人の日本軍
人が手に旗(やり)を下げ
た兵五、六人を連れて、家
に入ってきた。軍人は父や
叔父を連れて行くよう命

じ、父は足でけられ耳を打たれ槍でつつかれた。父だけが遅れていかれ、しばらくしてすさまじい叫び声が聞こえた。門を飛び出してみると、父はすでに首と胴体が別のものになっていた。街には何百という死がいが横たっていた、という。

その後、同僚の文通の中で、徳仁さんの弟の徳義さんが、東京裁判で見ると一緒に日本軍に懸われた様子を証言していたことが分かった。

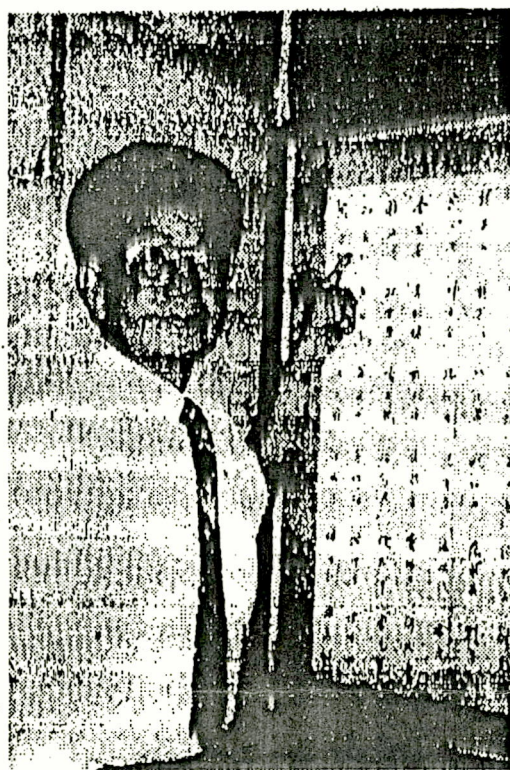
その証言では、十二月十六日午前十一時ごろの出来事。徳仁さんの長期には懸れられていないが、徳義さんを含め連行された人々た千人以上が、揚子江の川岸に集められ、機關銃を浴び

「けられた」

来口を前に、照常さんは手紙で「私は日本人に深い敵愾を抱いてきた。しかし、刻む会が誠実な謝罪をしてもらえるのを見て敬愛を感じた。日本で断罪を受けるのは光荣なこと」と伝えている。

同会の話では、これまでにも市民団体らが同事件の被害者の遺族らを中国から呼ほうとしたことがあつた

大阪での集会は「南京大虐殺の真相を明らかにする全国巡迴公演」の主権で十二日午後一時から大阪市中央区のピースおねさかで、歴史家の藤原彰さんの基調講演やシンポジウムがある。東京の集会は十三日午後六時半から千代田区の自衛隊会館で、参加費各千円。



犠牲者の名簿にある父親の名を指し示す尚照雲さん（11月15日、中国・南京市の偉業巨年南京大屠殺遇难同胞纪念馆で（心に刻む会提供）

じ、父は足でけられ耳を打たれ槍でつつかれた。父だけが遅れていかれ、しばらくしてすさまじい叫び声が聞こえた。門を飛び出してみると、父はすでに首と胴体が別のものになっていた。街には何百という死がいが横たっていた、という。